九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

教職履修生の学習支援ボランティアにおける学びと自己成長

嘉納, 英明
名桜大学人間健康学部

https://doi.org/10.15017/26715

出版情報：生活体験学習研究. 11, pp.35-44, 2011-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第11号　35－44（2011）

教職履修生の学習支援ボランティアにおける学びと自己成長

嘉　納　英　明*

Learning and Self-Growth of University Students who participate in Volunteer Work

Kano Hideaki*

１．はじめに

近年、奉仕活動・体験活動に関わる議論は活発である。教育再生会議（平成18年10月設置）は、高校の奉仕活動の必修化を提言し（「第１次報告」平成19年１月)、若者の多様な体験の充実（「第２次報告」平成19年６月)、自然体験活動（小学校)・社会体験活動（中学校)・奉仕活動（高校）の推進（「第３次報告」平成19年12月）を打ち出した。「最終報告」(平成20年１月）は、これまでの報告を総括し、ボランティアの充実と高校での奉仕活動推進・学校支援地域本部の全国展開を提言している。これらは、中教審答申（平成20年２月）と教育振興基本計画(平成20年７月）の中で具体的な方策として明記され、社会全体の教育力の向上を図るものとして学校や地域社会で実現しつつある。こうした国の政策動向と軌を一にして、行政と教育機関との連携によるボランティア活動推進策も活発である。例えば、東京都北区は、教育ボランティア情報バンク（人材情報）を設立し、ボランティアをしたい人とボランティアを求める人との橋渡しを行っている。東大和市は、学校教育に関心があり、自分の能力や特技を生かしたいと考える人材を募集し、京都府や鳥取県は、教職をめざす大学生や院生の学習支援ボランティアを展開している。小中高校で熱心に取り組まれてきた奉仕活動・体験活動は、大学教育との関係で議論され、特に、教職との関係で新たな動きをみせている。端的に言えば、教職課程におけるボランティア経験が重視され、在学中に一定期間の経験を課すことが、学生の教職観を確立するために重要であるという認識である。

沖縄県内に目を向けると、琉球大学教育学部の教育実践ボランティアの活動は広く認知され（平田幹夫「教員志望学生を対象にした『教育実践ボランティア』活動の11年」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第14号、2007年)、また、沖縄女子短期大学（那覇市）は、2007年度から那覇市と南城市、豊見城市と相互に「協定」を締結し、常時、学生ボランティアを学校現場に派遣している。名桜大学は、沖縄本島北部地区12市町村による公設民営大学という性格から（2010年４月公立大学法人へ移行)、名護市を中心に市町村への地域貢献が期待されている。名桜大学のこれまでの地域貢献をみると、大学主催の公開講座・移動講座、大学教員の自治体委員会委員、看護学科学生の地域住民に対する血圧測定や健康講座等、幅広く活動を展開してきた。学習支援ボランティアに関しては、教職履修の学生が学校現場の教育支援に一部関わってきた。

名桜大学ではこれまでの学校や地域における教育活動を一層展開することを目的として、本学と名護市間で「協定」(平成19年）を結び、教職履修生を学校・地域へ学習支援ボランティアとして派遣している。筆者は、学生の対人コミュニケーション力の

*連絡・別刷り請求先（Corresponding author）
名桜大学人間健康学部（〒905-8585　沖縄県名護市字為又1220-1)
メールアドレス　kano@meio-u.ac.jp

貧弱さ、異年齢との関わり経験や子ども・教師・学校に関する情報の少なさを危機的ととらえ、これらの課題を克服していくためにも、学生が学校や地域でのボランティア活動を通して学ぶことは重要であると考えている。学校や地域の中に身をおき、体験を通して他者とコミュニケートする力の大切さや「生」の現場情報を獲得していく機会として、学習支援ボランティアは、１つの方法論として有効である。

本稿は、①名桜大学が学生ボランティアを派遣するに至った経緯や仕組み、実際の派遣状況を報告し、②学習支援ボランティアを通して学生が何を学び自己の成長してとらえているのかについて事例を通して考察する。

２．学生派遣の経緯と仕組み

名桜大学は、開放制の教職課程をもつ大学である。本学では、保健体育、養護、英語、国語、商業、情報の一種免許状の取得が可能である。従来から、これらの教職を履修している学生で、市内外で学習支援ボランティア活動に参加しているという未確認情報が多かったため、学内の教職課程委員会は、実態把握と学生の事故防止、災害保険等についての対応を始めた。結論から言えば、教職課程委員会を主宰している本学教員養成支援センター（以下、「支援センター」と略）が学生の学習支援ボランティアに関する情報収集と学生指導及び学校・地域配置に関わる業務を担当することになった。

支援センターは、まず、学生がどこで、何を、何時間、ボランティア活動をしたのかを、学生自身が記録することが大切であると考えた。その理由として、直接的には、平成22年度の沖縄県の教員採用試験の願書から、ボランティア活動記録の記載が新項目として加わったからであるが、それよりも、学生の在学中の活動の記録を残していくことは教育的な観点からも重要であると考えたからである。そこで、「教育ボランティア記録簿」（Ｂ５版、平成21年度支援センター作成・初版、平成22年度は改訂版を作成）を配布し、ボランティア先の所属長等から「印」をもらう仕組みを整えた。「記録簿」の作成と合わせて、名護市教育委員会主催の臨時校長会にて、学習支援ボランティアの趣旨説明を行い、「記録簿」記載の方法と協力を求めた。その後、市教委からは、同様の内容が公文として各学校に配布され、周知が図られた。一方、ボランティア希望の学生には、支援センター直属のボランティアサークル（PURE SUPPORT、2009年７月設立）に一旦加入してもらい、そのサークルからの派遣とした。大学の災害保険加入の条件はサークル単位であるため、学生は一旦サークルに加入しなければならないからである。こうして、主に教職履修の学生を中心に、PURE SUPPORT に加入し、ボランティア活動に参加している。大学としては、教職履修の学生は、学習支援ボランティアに参加するように促し、義務化はしていない。また、単位化についても未定である。

現在、学生の学習支援ボランティアは、主に、名桜大学と名護市教育委員会の「協定」に基づくものと、名護市教育委員会社会教育課社会教育係の（「放課後子どもプラン」「学校支援地域本部事業」）の事業である（「図１．名桜大学 学習支援ボランティア活動」参照）。「協定」の内容は、学生による市内の小中学校での教育支援活動（特別支援、英語活動、

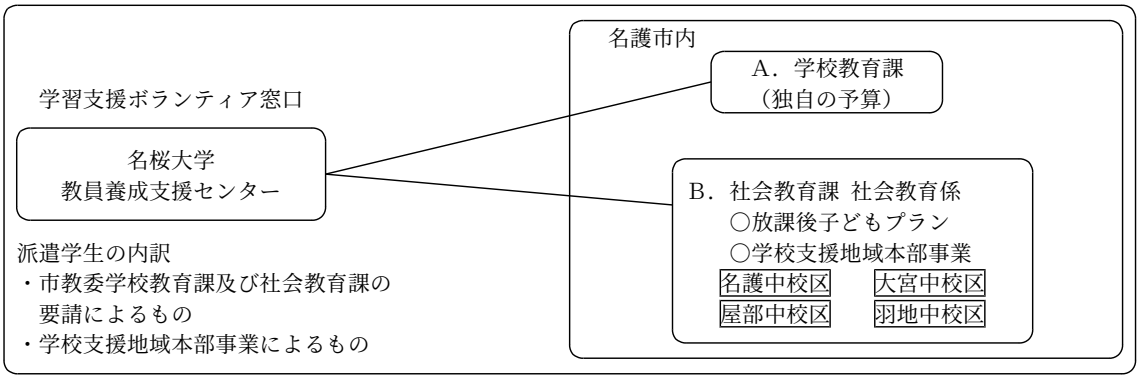

図１．名桜大学 学習支援ボランティア活動

学習活動、部活動、生活指導）である。学校教育課下の場合、「協定」に基づき、学生は一回につき約千円程度の手当を受ける（名護市教育委員会予算50万円／500回分の支給)。名護市社会教育課下の場合、放課後子どもプランは、謝金約千円が学生に支給されるが、学校支援地域本部事業におけるボランティアには、謝金は発生しない。

次に学生派遣の仕組みについて述べる。まず、ボランティアを希望する学生は、ボランティア申込み用紙に、氏名や連絡先、希望校種、希望時間帯、特技等を記入し、支援センターに提出する。市内の学校からは、ＦＡＸにて支援センター宛てにボランティアの要請がある。これに対して、支援センターの学生スタッフによる調整や学生自身が学校からのボランティア内容を閲覧し、学校へ出向く体制を整えている。放課後子どもプラン及び学校支援地域本部事業への学生派遣の場合は、地域コーディネーターが支援センターから提供された学生情報をもとに調整している。

PURE SUPPORT 加入・登録の学生は約80名である（2010年７月１日現在)。この内、週１回以上、ボランティア活動をしている者は、30名である。登録学生の全てがボランティアを希望しているが、ボランティア先との時間調整がうまくいかずに活動をすることができない状態である。現在、学習支援ボランティアを展開している主力は、３年次、次に２年次である。なお、学生のボランティアに関する情報交換と資質向上を目的に、学内で学習支援ボランティア情報交換会を開催したところ（2010年４月)、約90名余の参加があった。事例発表とボランティアの手続きに関する説明が主な内容であったが、学生の学習支援ボランティアについての関心は非常に高いものであった。

３．活動内容と学校の評価

⑴　学習支援ボランティアの活動内容と学び

ボランティアを始めた学生の動機は、実に様々である。学生の活動報告書からは、学校現場の状況や子どもの実態、教師と子どもとの関わり方について学びたいという動機が最も多い（名桜大学教員養成支援センター「活動報告書」2009年12月)。特に、翌年度教育実習を予定している３年次は関心が高い。これは、「教育実習前に学校現場や子どもの実態を知りたい」という声に代表される。子どもや教師との関わり方や学習指導の進め方を実践的に学びたい学生が相当数存在していることの表れである。しかも、「学校や子どもの状況を自分自身の目で確かめたい」という回答は多く、大学での学びを自分の視点で確かめようとする姿勢である。日常的に小中学生と関わる機会がない学生にとって、ボランティアを通して、今の学校や子どもと向き合う機会があることは貴重なことである。現場はまさしく実践が主であるため、子どもや教師との関わり合いの中で学ぶことの価値を見出している学生もいる。また、大学での学びとボランティアとの学びを結びつけようとする学生もいる。近年の発達障がいと関わって「特別支援教育は学校現場でどのように行われているのか」、「教師の対応や子どもの現状について確かめたい」という回答である。

こうした動機からボランティアを始めた学生は、どのような活動をしているのだろうか。そこで、学習支援ボランティアに参加している学生を対象にアンケート調査を実施した（2010年２月１日～８日)。男子学生10名、女子学生24名、計34名である。学習支援ボランティアに参加している学生は、名桜大学で取得できる教員免許状のいずれかを希望している。ボランティア活動の時数（のべ）は、男子52.0時間(最長127時間、最短８時間)、女子53.3時間（最長200時間、最短４時間）であり、活動時間にバラツキがみられるが、これはボランティアの開始が早い学生は、当然、のべ時数も多くなり、３～４年次の学生に顕著である。ボランティア先は、小学校のみでの活動が53%、中学校のみでの活動が23%、小中学校いずれにも関わっている学生は24%である。活動内容は、授業や放課後の学習支援が主である（表１)。給食の準備や図書室の整理等を行う学生は、校内美化活動や清掃活動にも積極的に参加している。通常、給食の片づけと清掃は連続して行われるので、この場合、学生は、いずれにも関わって参加している。養護教諭の免許状取得者のうち、保健室の支援を行っている者は67%である。

学生のボランティアは、①授業における学習支援、②給食や清掃指導、③放課後の子どもの学習支援・子どもの遊び相手、④学校 HP の制作・更新、⑤学

級便りや部活動の活動記録、PTA 便り、保健便り等の制作補助、⑥保健室登校の生徒の活動補助（図書、環境整備)、⑦保健室の掲示物作成や貼付、⑧部活動指導補助、である。名桜大学では、養護教諭の免許状が取得できることから、保健室で問診や体温測定、バイタル測定等を行い、養護教諭の補助活動を行う者もいる。また、スポーツ健康学科に所属し、体育免許取得をめざしている男子学生は、放課後、野球部の指導補助として参加している。このように、学生のボランティアとしての関わり方も一様ではなく、学生の得意な分野や持ち味が生かされながら展開されている。

次に、学生は、学習支援ボランティアを通して何を学んでいるのであろうか。表２から、学生は、「子どもとの関わり方・コミュニケーションの取り方」を学んだと回答し、「教師との関わり方・コミュニケーションの取り方」を学んだと回答する者も多い。ボランティアは、当然、学校で行われるものであるから、子どもや教師との直接的な関わりが要求され、「具体的に子どもとどのように関わり、学習支援していくのか」、「子どもの学習支援のために教師とどのようにして関わるのか」ということが問われる。ボランティア活動を始めた学生にとって、「子どもとの関係性」の構築は、全ての学生の共通の課題であるとともに、学習支援を通しての最も重要な学びとなっている。

このように、学生の最大公約数的な回答は、学校における子どもの実態や子どもとの関わり方についての学びである。子ども自身や家庭的に問題を抱えている子どもに対して、現場教師の指導を受けながら、その子に合った関わり方を模索している。「学校では、関係づくりが重要になっている」という回答を寄せる学生もいる。多くの学生は、子どもの発達段階に応じた接し方、コミュニケーションの取り方、言葉の遣い方等を目の前の子どもに合わせて対応していくことが大切であると考えている。小学校で活動をしている学生は、「登校時や授業中、休み時間等の場面に応じた子どもとの接し方が微妙に違うことに気づき、また断るときには断り、叱るときには叱るという、その時々で対応することの大切さ(男子Ｓ学生)」を学んでいる。幼児園で活動をしている学生は、「幼児との遊びや園活動を一緒に行い触れあいながら、子どもの様子をつかみ、発達段階に応じた接し方や子どもへの話しかけ方（女子Ｔ学生)」を学んでいる。

ボランティア先で子どもとの関係性について学び、また「子どもとの距離をどのように保てばいいのか」、「どの程度までサポートしたらいいのか」、「どこまで叱ったりしたらいいのか」等、実際の子どもとの場面で悩む姿も多い。兄弟姉妹のいない学生や小中学生と日常的に触れ合う機会のない学生にとっては、まさしく、年の離れた小中学生とのコミュニケーションの取り方に困惑している姿もある。その他の学生の学びは多岐にわたるが、一例としては、指導者と

表１．学習支援ボランティアの活動内容

	内　　容	%
1	放課後の子ども学習支援	71
2	授業中の学習支援	50
3	保健室の支援	26
4	放課後の部活動支援	21
5	清掃の支援	18
6	給食の支援	15
7	校内美化支援（散水、土づくり）	12
8	学級・学年便り等の制作補助	8
9	図書室の整理・貸し出し補助	8
10	朝の読み聞かせ	8
11	ＨＰの更新・制作補助	3
他	教材作成補助、朝の交通整理	

表２．学生の学び

	学んだこと	%
1	子どもとの関わり方・コミュニケーションの取り方	100
2	教師との関わり方・コミュニケーションの取り方	59
3	教師の職務（仕事）内容について	56
4	地域の実態について	38
5	保護者の実態について	32
6	学校の組織について	29
7	保護者とのコミュニケーションの取り方	12
他	子どもの心身の問題等	

しての確かな知識と技術、学校と地域の連携の大切さ、子どもの成長や発達にとって教師の存在の大きさ、自分自身の教職の適性が試されている等の回答もみられた。

⑵　学校の評価

学生ボランティアを受け入れている学校の評価はどうだろうか。名護市教育委員会は、市内の小中学校を対象にボランティアに関するアンケートを実施した（2009年10月15日）。まず、現場教師のボランティアの受け止め方として、学生が子どもとふれあい、関わり合うことで、子どもの学習意欲や期待感が高まっているという点を挙げることができる。この点は、学校現場の教師のヒアリングからもよく聞かれる点である。担任教師と違って、「小中学生にとって年齢が近いため、気軽に話せるよき相談相手としての存在」といえるだろう。その他にも、学校のマンパワー不足を補うための支援員としての学生ボランティアの存在は、学校にとっては、必要なものとしてとらえられている。学校から出された積極的な評価に関わるものとしては、以下の意見があった。

①図書分類シールの張り替え作業が迅速に運び、古本が新品同様となって児童にも喜ばれた。
②学生が子どもとのふれあいを大切にしているため、子どもたちが意欲的に学習に取り組んでいる。
③運動会の練習で、子どもと共に活動を進めていて、また学生に来て欲しいと思っている。
④どの学生も礼儀正しく子どもへの対応も適切にこなしている。
⑤児童とのコミュニケーションが図られ、時間も守ってくれる。
⑥授業に遅れがちな子どもに声かけをしてくれるので助かる。
⑦学校行事の際には、人手が欲しい。その時には助かる。
⑧中国籍の生徒のために、中国語ボランティアが入ったことで生徒の表情がとても明るくなった。

一方で、今後の課題としては、学生の授業（時間割）との調整や連絡の難しさ、学生の消極性、身なりや言葉遣い、そして学生の長期的・継続的なボランティア活動等を挙げている。「期待している点」として、子どもとの信頼関係の構築と子どもにとっての良きモデルとしての大学生、学生自身の資質向上のためにボランティアをすることの大切さを挙げている。

４．学生の学びと自己成長－省察を通しての学び－

学生の学びは、「子どもとの関係性」をめぐるものが中心であるが、個々の学生の派遣先や子どもとの関わり具合により、関係性の学びの内容も多様である。学生は、学習支援ボランティアを通して、子どもとの関係性についてどのように考え、また対応しているのか、そして学びの実相とは何か、事例を通して検討する。

事例１は、学習支援ボランティアに関わっている女子学生Ａによる発話を記録したものである。学生Ａは、私立の中高一貫進学校から大学に入学したが、在籍する学科の内容に違和感を感じ、将来の進路に不安を抱えながらボランティア活動を行っている。

事例１（女子学生Ａ）　昨年の９月の末に、名護市内の中学校の教頭先生から電話があった。友人のＹも同じ中学校でボランティアをした。毎週木曜日の午後４時半から２時間、女子バスケットの指導で、私よりも一つ学年が上の先輩と一緒に指導することになった。女子バスケットに顧問はいるが、ほとんど指導をすることがなかったようで、生徒は自分たちで練習をしている状態だった。私は、中高校ともバスケット部に所属し、先輩後輩の上下関係や練習の厳しさを知っているつもりだった。でも、ここの中学校は随分違っていた。私は、先輩と一緒に練習メニューを組み立て、これを生徒達に教えた。攻撃守備のやり方、シュートの仕方等。でも、練習に来る生徒は、いつも７名程。顧問はいるが、部活動の指導にはほとんど来ない。生徒との初めての対面の時、挨拶はしない、行動はダラダラ、練習中にマンガを読み、暴言も吐くという状態。２年生はミニバスケ経験者が多いため、練習には熱心だったが、１年生は、ダラッとしている感じ。厳しい部活時代を過ごしてきた私にとって、「あり得ない」状態だっ

た。シュートの仕方についても基本的な構えが出来ていない。私達の指導に２年生はついてきたが、１年生はいつもざわざわしている様子。私の過ごした中学時代とこんなにも違うのかと驚いた。こんな中学校もあるのかと。隣のコートで練習している女子バレーは真面目に練習していて、実際、強いし、男子バスケット部もそうだ。女子バスケットの場合、生徒と、(一応いる）顧問の先生の壁を感じた。また生徒の中にも意識の差がかなりある。バスケットに対する構えというか、姿勢の差みたいなもの。特に、２年生と１年生の差。どうにかしないといけないと思っていたけど、週１回の指導では何も出来なかった。

新年度に入り、大学の時間割が変わったため、ボランティアの時間の調整が必要になった。ボランティアは続けたかったので、自分から教頭先生に相談した。保健室のボランティア活動を希望した。今どきの中学生事情をもっと知りたいと思ったし、保健室経営に関心があった。ここの中学校は、月曜日の欠席者が目立つ。私は、火曜日と木曜日の午前中、保健室のボランティアに関わることにした。４月と５月は、健康診断や歯科検診等が多く、カードの分類や並び替え作業等を行った。検診の補助として、生徒を並ばせたり、順番よく呼びかけすることもした。保健室登校の女子生徒との関わりもある。この子が手品を見せてくれたこともある。子どもとトランプや校内散歩もした。また、中３の女子２名は、髪を染め、眉もない。明らかに自分がいた中学校とは違う。中学生がかわいい。男の子は身長を測りに来る。保健室に来て教室に帰らない子がいる。教室に行きしぶりの子には、声のかけ方がわからない。保健室登校も多いし、ヤンキーも保健室に来る。問題を抱えているんだろうなあという子がいる。(2010年５月21日記録)

＜考察＞　学生Ａは自分自身の中学時代と目の前の中学生を重ね合わせ、そのちがいに困惑し、子どもとの関わり方について悩みながら、ボランティア活動を続けている。自己の中学生体験と実際の中学生の実態とのズレを感じているが、どのように対応すべきかについては見通しは立っていない。本人自身も学業上の悩みを抱きつつ大学に通い、保健室の窓からみえる、問題を抱える中学生に対してある種の共感をもって接している。問題を抱えているんだろうなあ、というつぶやきは、Ａ自身の置かれている状況と重ね合わせて子どもを見ていることの表れである。

養護教諭の免許状取得を希望する学生Ｂは、ボランティア活動後、教職の授業では率先して発言したり、進行役を買って出る等、活動的な場面がみられた。卒業後の進路は、教職ではなく民間企業である。就職活動の合間を縫って、学生Ｄ（事例５）と共に、バスケットの指導をしている。

事例２（女子学生Ｂ）　ボランティアは、平成21年度の６月から始めた。小１～２年生の放課後子ども教室。名護市内のＨ小学校で軽い気持ちで始めた。どこの小学校でもよいと考えていたが、あてはまった先が、たまたまＨ小学校だった。ボランティアの初心者だけで始めたので、最初は、何をしていいのか、よくわからなかった。学校からの説明も概略的であったし、学校の指示で、私たちボランティアが動くものと思っていた。でも実際は、お任せ状態。最初の頃は、子どもの宿題を教えたり、早く終わった子どもとは、一緒に遊んだりした。クリスマスパーティやバレンタインデー等の企画をした。火曜日は、私たちとは別の学生が来た。主に、子どもの宿題の面倒と遊び相手の活動だったようだ。私が活動していた木曜日は行事を企画したり、実際に行ったりした。ボランティアをして考えさせられたことは、子どもが席に着かない場合、どのようにしたらいいのか、ということだった。行事の時には、親の迎えが来ても帰りたがらない。子どもは行事の企画に乗ってくれた。ただ、景品が十分行き渡らなくて、子どもからブーイングがあった。実際に行事をしてみて、「あーすればよかった」と思うことも度々あった。特に、ビンゴで外れた子がベソをかいて、そのフォローも十分出来なくて、オロオロしてしまった。ある時は、小学校２年生の女子の関係がこじれて、個別に話し合いをしたこともある。学年末の閉会式で、その女子が、「けんかした時、止めたのがよかったです。」というコメントがあった。私たちが、こじれた関係の中に入って、調整が十分上手くいったとは思わないけど、その対応が子どもに受け入れられていたのだと思った。ボランティアをして、子ども

と直接関われたことがとても良かった。教育実習前に子どもと関われることはとても貴重だった。仲間の学生は、ボランティア終了時間が過ぎても「このまま、子どもといたい。」と言っていたけど、私もそうだった。子どもと関わって、「言っても聞かないのはどうしてだろう。」とか、「こういう風に言ったから、聞かなかったのかなあ。」という、子どもの立場に立って子どもをみるようになってきたと思う。また、自分の小学生時代をよく思い出して、「自分は小学生の頃、どんな時が楽しかったのかなあ。」、「小学生の時、どうしていたんだろう。」と、振り返ることがよくあった。部活動の支援で、保母会とのつながりが出来て、いろんな人と出会えたことが大きな収穫だった。(2010年５月21日記録)

考察　学生Ｂは、子どもとの関わりができるボランティアを楽しみ、実習前に経験できたことを素直に喜んでいる。Ｂは、小学生との関わりの中で、その対応の在り方を考えるために自分自身の小学生時代を振り返り、省察している点が特徴的である。また、子どもの立場に立って子どもをみるようになってきた、という。子どもへの対応をしていくことの大切さに気づき始めている。子どもとの関係を深める手がかりが、自分の小学生時代であり、そこへ思いを寄せているのは、子どもとの積極的な関係性を構築したいからである。

学生Ｚは、中高の保健体育の教員免許状取得希望である。教職の授業場面では、ほとんどノートをとらず、授業参加は熱心ではなかった。学習支援ボランティアの話を持ちかけると、その後、活動には一生懸命であった。ボランティア先の校長やコーディネーターからも、特に子どもからも人気があった学生である。母親は元保育士、姉は小学校の臨時教師をしている。子どもや教育に対しては関心をもっている学生である。

事例３（男子学生Ｚ）　ボランティアはやってみたかったので、教職の授業の先生から話があったので始めた。小さい子が好きなので、母校のＭ小学校でのボランティアは非常に楽しかった。地元の保護者２名とコーディネーター、学生３～４名程度で活動し、１～４年生の子ども20名程度。放課後子ども教室の活動で、私は、週１回で正味１時間の活動だった。始めは、学校から出された宿題を教えていた。子どもが早めに終えると、一緒にコマ回し、肩車、腕相撲。最初、小学生は人見知りするかと思ったが、案外、人なつっこい。でも、中学年になると、特に女の子に対しては気を遣った。ボランティアの学生の取り合いみたいになることもあったから。私自身、ボランティアの立場なので、子どもに対しては厳しく指導できない。どちらかというと、冷静に話をした方がよいと思っていた。一人一人の子どもに声をかけるように意識していたし、また子どもからもあちこちから呼ばれた。子どもは、自分（ボランティア）にかまって欲しい、という感じ。家に帰っても親がいない、寂しがり屋の子がいて、その子を抱っこしたりすると、とても喜んだ。子どもは嬉しそうにいつもくっついてきた。スキンシップを大切にした。とにかくいろんな子がいた。教室で仲間はずしの場面もみて、注意らしきことをしたけど、週１回の関わりでは難しかった。時間的にも十分なフォローが出来なかったからだ。子どもの「来週も来てね」の声で、楽しみになっていた。母校で一緒にボランティアをしている学生とは、学内でも会えば話をするようになった。教室に来る地元の保護者とは声を交わすようになった。私の母親は元保育士で、自宅も託児所だったので、小さな子どもと接触の機会があった。ボランティアを通して小学生の頃を思いだしたし、人脈がひろがった感じだ。教育実習に行く前に、やはりボランティアは役立つと思う。実習前に子どもと慣れておくというのは大変良い。学校現場の雰囲気もみることができた。ボランティア最後の打ち上げには、教員も交えて、非常に楽しかった。雰囲気がよく、自分もその一員になりたいと思った。また、ボランティアをしたいし、隣の母校である中学校で部活動の指導をしたい。野球をしていたので、この経験を生かしたい。(2010年５月24日記録)

考察　学生Ｚの自宅は託児所だったこともあり、幼少児との関わりは早くからあった。そのため、小さな子どもが好きだというＺにとっては、母校でのボランティア活動は、すぐに馴染めるものであった。子どもの扱いは馴れていて、それは、寂しがり屋の子どもとのスキンシップを大切にする等、柔軟な対応に表れている。子どもの実態に触れるという点からも、教育実習前のボランティア活動に価値をおい

ている。学生Ｚは、小学生の頃を思いだしたりしながら、活動に参加している。

中高校の保健体育の免許状取得めざす学生Ｃは、協定大学の通信課程で小学校の免許状取得も目指している。明朗快活な学生である。大学の課外活動では水泳部に所属している。PURE SUPPORT の学内連絡係として、学生とボランティア先をつないでいる。

事例４（女子学生Ｃ）　名護市内の小学校と中学校にボランティアで行っている。去年の11月から、そのうちのＨ小学校にも行っている。Ｈ小学校で読み聞かせが行われているということを聞き、自分から学校に電話した。この頃、市内の中学校と幼児園のボランティアをしていたので、中学校と幼児園の間にある小学校で関わりを持ちたかった。特に、小学生の実態についても知りたいと思っていた。というのは、中学校と幼児園の実態はボランティアを通して知っていたので、次は小学校でと考えていた。私は、中学校と高校の保健体育の免許状と協定大学の通信で二種免許状の取得を目指しているが、今年、中学校の教員採用試験を受けるか、あるいは小学校で受けるか、ボランティアで自分自身の向き不向きをみたかった。Ｈ小学校には、私を含めて大学生１～２名で読み聞かせをした。これは、小学校の図書室の先生から直接依頼があった。Ｈ小学校では、４～５年生との関わりが多い。高学年は、中学校への不安があるらしく、「中学校ってどんな感じなの？」ということをよく聞いてくる。小学生は、段々馴れ馴れしくなってくるので、時々、厳しく言って聞かせることもある。ボランティアをして、先生方との交流もやっぱり生まれて、子どもの学級での様子等も話題として入ってくる。読み聞かせ以外にも、水泳指導の補助をしているが、ウオーミングアップから実際の練習等、授業の流れまで全て一人でやっている感じ。先生方と授業前に簡単な打ち合わせをするが、私が一人でやっている。先生方からは、「水泳の指導方法が分からない。」という声もあったり、若い先生は、プールに入らないこともある。「ここまでボランティアに任せていいのか。」という思いがあるが、反面は期待されているので嬉しい。子どもと話をしていると、「Ａ先生のこんなところ直して欲しい。」とか、いろいろな声がある。信頼されている先生もいれば、信頼されていない先生もいる感じ。信頼されている先生は、子どもにしっかり指導する、本気で怒る時は怒る、という感じ。でも、子どもの言い分だけを聞いていてはいけないとも思う。小学生は、名前を覚えて声をかけるとすごく喜びます。学習支援で他校でも関わっていますが、何度言っても、指導しても分からない児童もいる。席にも座らない児童もいる。児童を引きつける方法を考えることが大切だと思う。

プライベートで、買い物に行った時、子どもや親から、「先生！」と声をかけられた。先生になった気分で、くすぐったい。周りからの視線を感じてちょっと恥ずかしい。ボランティアをしている学生からも、学内で声をかけられる。自分自身のネットワークが広がった。また、Ｈ小学校の実態が分かるようになったおかげで、小学校の先生になった立場でなんとなく状況が想定できる。教育実習に対しての不安がなくなり、とても自信がついた。ただ、自分の自由な時間がとれなくなったので、一校に絞って活動をすることも大切だと考えている。時々、ボランティア先やコーディネーターから突然依頼が来る場合もあって、それはとても困る。また、やけに長時間のボランティアは大変で、結構きつい。(2010年５月25日記録)

考察　精力的にボランティア活動をしている学生Ｃは、教職の適性を活動を通して見極めたいとしている。結論はまだ出ていないが、Ｃの最大の学びは、子どもへの指導の在り方として、いかに児童を引きつけるかが大切だと気づき始めている点である。ボランティアを通して、自身のネットワークが広がり、また、教師＝指導者としての自覚が生じてきている。学校現場の学生ボランティアの活用の在り方についても問題点を指摘している。

学生Ｄは、比較的おとなしい学生である。ボランティア先では、高校時代のバスケット経験を活かして子どもの指導をしている。ボランティアをしている学生の中でも、最も熱心に活動を展開し、長期間関わっている。ミニバスケット部の指導を通して、他校との試合を楽しみ、人的ネットワークを広げている。

事例５（女子学生Ｄ）　教職担当の先生からボランティアの紹介があって、それで始めた。沖縄の採用試験の願書には、ボランティアの活動記録欄もあるので、やっていた方がいいと思ったから。H小学校の教頭先生から電話があって、私自身もバスケットの経験があるので、子どもたちへのバスケットの指導を始めた。監督も顧問もいないというか、子どもだけで活動している部活だった。たまたま試合を見に行ったとき、子どもたちには、才能があるし、自分が育ててみたいと思った。新チームになった今年の１月から本格的に指導を始めた。バスケの経験はあるが、教えることは初めてだったけど、ランニングシュートの一つだけでも、走ってジャンプさせる等、楽しく学べる方法をいつも考えていた。バスケの本を読んだり、自分の出来る技を楽しく身に付ける練習方法を考えて、子どもを指導した。悩みながらも徐々に練習メニューを整えた。子どもたちは結構素直に聞いていた。私が指導しているとき、地域の監督が来ていて、練習方法に納得しているようだった。子どもの成長というか、変化というか、それが楽しみであった。最初、子どもたちは、私をコーチとして見ていなかった。自分も、最初は、「バスケットを教えてあげる。」という上からの目線で子どもを見ていたけど、今は、この子たちを支えたい、子どもの目標達成に少しでもいいから力になりたいと考えている。また、このチームには、審判をする人もいなかったので、私が審判講習会に出て、ミニバスケのルールを学んだり、他校との情報交換をしたりした。こうして、バスケット仲間やコーチとも知り合い、次第に練習試合をするようになった。審判講習会や練習試合を通して、本当に人脈が広がったと実感している。バスケの県大会に出た時、「この子は養護教諭をめざしているよ。」と、あちこちに紹介され、気恥ずかしいけど、とても嬉しかった。元々、自分の方から話しかけたりする方ではなかったけど、段々、人前で話すことが出来るようになった。本当に前はおとなしめで、自分の考えはもっているけど、自分から進んで話す方ではなかった。自分の方から関わることができるようになった感じ。関わりを楽しむようになった感じ。親戚や父親からも、「随分、変わったね。」と言われ、親戚の叔父さんから、「自分の娘もあなたのようになって欲しいよ。」と言われた。これも、とても恥ずかしかった。(2010年５月27日記録)

考察　学生Dは、当初、採用試験の願書にボランティア活動歴があることから始めたが、自身のバスッケット指導を通して子どもと関わり、子どもの変容を喜ぶようになる。子どもがバスケットの技術習得ができるような練習方法を開発する等、子ども視線で指導技術の開発をするようになる。学生Dは、ボランティア活動により、人とのつながりを意識し、自身を振り返り、自己をみつめているといえる。波線の箇所は、まさしく自分自身の振り返りであり、ボランティアを通しての自分の成長を積極的に評価している。

５．おわりに－学習支援ボランティアと学生の学び・自己成長－

ボランティアに参加している学生は、子どもとの関わり方やコミュニケーションの取り方について実に多様な学びを深めている。それゆえ、学習支援に参加している学生は、教育実習前にボランティアをすることに価値を見出し、これの重要性を強調している。対象である小中学生との関わりの中で、自己の小中学生時代と重ね合わせ、そのズレに戸惑いつつも目の前の子どもとの対応に腐心している姿がある。子どもとの関わり方や関わり具合を常に意識しながら、「これでいいのか、これでよかったのか。」という省察をしながら活動に参加している、といえる。これは、実際の子どもとの信頼関係を含めての関係性の構築のためには、まずは学生自身の小中学生時代への振り返りと対照化が、今の子どもとつながる手がかりであると考えている。

学生の省察は、学生の子ども観・教育観を、あらためて子どもの事実から問い直す作業であると同時に、子どもの見方・とらえ方を修正し、鍛え直す機会である。これは、複眼的に子どもをとらえ、理解することにつながるものである。また、学習支援ボランティアは、こうした子どもとの関係性を学び、学生の子ども観を鍛え直すだけではなく、まさしく学生自身の自己成長の場でもある。学校現場でのボランティア活動を通して、子ども以外の教師や保護者、地域住民とのつながりが生まれ、それが人的なネットワークを広げる機会となり、学生自身の生活

を組み替え、活力と積極性を引き出していく可能性を持っている。学生の人的ネットワークが広がりをみせ、学生が社会とつながり、それを契機として自分自身の生活の振り返りと自分つくりを痛感しながら活動に参加している学生もいる。教職の学びは、大学の教室空間においても当然生まれているが、実際の子どもとの関わりの中での学びについても収穫が大きいことを学生が肌で感じているのである。地域の学校で学習支援ボランティアを通して学ぶことは、学生が教職の価値や意義を改めて問い直す機会でもある。

学校支援ボランティアは、多忙な学校現場から「猫の手」も借りたい状況からその需要は大きいが、単なる学校や教師の人的パワーのお助けではなく、学生の学びの場であり自己成長の場であるという視点から、今後は、学習支援の内容を大学（学生）と学校が共同的に開発する必要がある。つまり、学生による学習支援が子どもの支援につながるとともに、学生自身の学びと自己成長につながる内容と場を保障するものであることが求められている。

本稿は、学習支援ボランティアにおける学生の学びと自己成長について、主に、学校評価と学生の活動・学びの軌跡の記録を分析の対象とした。今後は、「学生自身の学びと自己成長につながる内容と場を保障」するために、①学生自身が活動を振り返る機会を設ける（リフレクションの効果的な導入)、②学生ボランティアが直接関わっている子どもやボランティアコーディネーターによる他者評価の活用、③学生同士の相互評価による学びの深化、等を検討する必要があろう。今後の課題としたい。